

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H01026

研究課題名(和文) アジアの高等教育を牽引する「内なる国際化モデル」の開発

研究課題名(英文) Development of Internationalization at Home in Asian Higher Education

研究代表者

末松 和子 (Suematsu, Kazuko)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・教授

研究者番号：20374887

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,220,000円

研究成果の概要(和文)：これまでの研究成果を基盤とした新規研究プロジェクトを推進した。2019年に研究チームで執筆した書籍を基盤とし、ハイフレックス型国際共修の意義や手法を加えた教材を開発し、国際共修授業のペダゴジーや学生サポーターの巻き込み方等、学生主体の教育実践を包摂した国際共修関連情報をホームページで発信することができた。日本国内はもとより海外でも論文、学会発表、研修会で成果を発信した。また、国内の6大学を対象とした国際共修大規模調査にも着手した。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で予定していた調査を変更するなど課題にも直面したが、アジア特化型「内なる国際化モデル」を構築するなど大きな成果を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際教育後進国の日本では、内なる国際化の一環として行う国際共修のペダゴジー開発、効果検証に関する組織的な研究は未だ少ない。そのような背景の中、本研究では書籍、論文、国内外の学会、シンポジウム等を通して国際共修の効能や教育的価値を積極的に発信することができた。これにより国際共修を中核とした教育の国際化の発展に大きく寄与することができた。欧米豪などの移民の受入を原資として発展した多民族国家とは事情の異なるアジア特化型「内なる国際化モデル」を構築しそれを世界に発信できたことは大きな成果と言える。

研究成果の概要(英文)：Based on the previous project about Intercultural Collaborative Learning (ICL) and the book published in 2019, we developed teaching materials that added the significance and methods of high-flex ICL and encompassed student-centered educational practices, such as pedagogy of ICL classes and the involvement of student supporters, which were all disseminated on our website. The results were also presented through papers, conference presentations, and workshops in Japan and abroad. We also initiated a large-scale ICL survey targeting six universities in Japan. Although we faced some challenges, such as having to change the planned survey due to the spread of the new corona infection, we were able to achieve significant results, including the establishment of an Asia-specific "Internationalization at Home" model.

研究分野：国際教育

キーワード：国際共修 異文化間教育 内なる国際化 国際教育

1. 研究開始当初の背景

多様化・複雑化する国際社会において、いわゆる高度専門グローバル人材の育成を主眼に据えた教育改革が進みつつある。1990年代後半から欧州を中心に広がったカリキュラム改革、国際社会で活躍するための必須スキルとしての異文化コンピテンシーなどがこの一例である。我が国もこの教育改革の影響を受け、グローバル人材の資質や能力に対する議論が近年活発化し、文部科学省のグローバル人材育成推進事業(H24～H28)をはじめとする諸政策にも反映されて来た。同事業では、語学・コミュニケーション力のみならず、主体性、積極性、課題解決力、柔軟性等をグローバル人材が有すべき能力と定め、特に海外留学を必須としたカリキュラムによる人材育成が奨励されている。海外留学の効能は多くの研究で実証されており、異文化コンピテンシー(Stebbleton 他, 2013)、創造的考察力の伸長(Lee 他, 2012) 積極性・行動力、問題解決力(小林, 2015)など、いずれもグローバル人材の能力・資質と関連付けられている。しかし、様々な事情で留学しない・できない学生層が大多数にのぼることは世界各国共通の課題となっている。

これをもとに発展したのが「内なる国際化」(Internationalization at Home)である。Wachter(2003)がそのコンセプトを紹介し、その後、Knight(2004)をはじめとする高等教育国際化の研究者らがCross-border Education(海外留学)と並ぶ重要な高等教育の国際化施策であると提唱した。留学できない・しない学生のために国内においても国際的な体験ができるよう正課内外のカリキュラムをデザインする内なる国際化は、北米を拠点とするNAFSA(国際教育交流協会)や欧州を中心に展開するEAIE(欧州国際教育協会)も強く推奨しており、新型コロナウイルス感染症パンデミックにより、その価値はさらに世界中に認識されるようになってきている。この「内なる国際化」の一環として、留学生と国内学生の国際共修授業が注目されている。国際共修とは、あらかじめ入念に設計されたカリキュラムや授業案と意図的な教育介入により、言語・文化背景の異なる学生同士が意味ある交流(Meaningful Interaction)を通して学び合う学習機会である。我が国でも近年、学会等で国際共修の実践報告が散見されるが、欧米豪のような理論に裏打ちされた教育実践ではなく、共修の教育効果に着目した実践者が裁量の範囲内で完結させているケースが多い。理論構築や教授法の開発、効果検証においては発展途上であり(末松, 2017)、国際共修を課外にも適用した「内なる国際化」、また欧米豪で発展した理論の日本の教育現場への適用や効果検証は、政策・比較研究や教育実践研究においても希少で、今後の高等教育において改革が最も望まれる分野にありながら、政策提言等の基礎となる研究や資料整備は進んでいない状況であった。

2. 研究の目的

欧米豪で進む高等教育の「内なる国際化」とりわけ留学生と国内学生の正課内外国際共修に着目し、国内の実態調査、海外施策・実践比較研究、日本をはじめとする非英語圏の高等教育現場に適した国際共修教授法の開発、また国際共修の効果検証を通して日本やアジアに特化した国際共修や「内なる国際化」の在り方を明らかにする。日本における国際共修の実践実態の把握、「内なる国際化」が進む海外主要国の施策および実践比較研究を通して理論構築を行い、日本やアジア独自の国際共修を考察する。発展的・包括的な国際共修カリキュラムおよび教授法を開発し、国際共修の効果検証を正課外にも拡大することで海外留学の準備や代替としての国際共修を「内なる国際化」の枠組みで捉え、その有効性の明示と政策提言を行う。最終的には、移民の受入を原資として発展した多民族国家とは異なるアジア版「内なる国際化モデ

ル」の開発・普及に寄与する。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、これまで関係を構築してきた国内外の「内なる国際化」研究第一人者らと協働し、それぞれの専門性を活かしつつ研究目的に適した手法を用いて以下の発展的・包括的プロジェクトを実施した。

- (1) 日本の高等教育機関における国際共修実践実態調査：国内の大学を対象に、国際共修実践状況についてアンケートおよびインタビュー調査を実施した。
- (2) 国際共修関連理論の整理と海外実践の比較研究：多民族国家の欧米豪で発展した理論と実践両面での比較研究を遂行した。
- (3) 既存理論の応用と日本・アジアにおける理論構築研究：欧米豪の理論および実践比較研究をもとに日本およびアジア独自の国際共修のあり方および理論構築をグラウンディッド・セオリー・アプローチを用いて実施した。
- (4) 日本およびアジア特化型カリキュラム・教授法開発：上記の調査の成果、エマージング理論を整理し、日本およびアジアの高等教育現場に適したカリキュラムと教授法の開発・研究を推進した。
- (5) 国際共修の学習効果検証：教授法・カリキュラム研究で構築した指標をもとに成果検証を実施した。
- (6) アジア地域における「内なる国際化モデル」構築：欧米豪などの移民の受入を原資として発展した多民族国家とは事情の異なるアジア版「内なる国際化モデル」を提示した。
- (7) 同モデルの普及・検証：研究の集大成としてモデルの汎用性、通用性を検証しながら普及した。

4. 研究成果

本研究では、日本における国際共修の実践実態の把握、「内なる国際化」が進む海外主要国の施策および実践比較研究を通して理論構築を行い、日本やアジア独自の国際共修を考察した。発展的・包括的な国際共修カリキュラムおよび教授法を開発し、国際共修の効果検証を正課外にも拡大することで海外留学の準備や代替としての国際共修を「内なる国際化」の枠組みで捉え、その有効性を明示することができた。本研究の成果により、移民の受入を原資として発展した多民族国家とは異なるアジア版「内なる国際化モデル」の開発・普及に寄与することができた。

とりわけ、「内なる国際化」および「カリキュラムの国際化」の主要教育実践、留学生と国内学生の正課内外の学び合いを取り入れた国際共修を主軸とした研究活動を大きく進展することができた。国内外における文献・質問紙・ヒアリング調査、国内のグッド・プラクティスの収集や教授法の開発に取り組んできた本科学研究費研究チームで、教本的書籍を執筆し、国際共修の知識基盤形成に寄与することが出来た。当書籍は、我が国における高等教育の国際化やグローバル人材育成に関する政策・施策の発展に資する実践的な参考資料としても有用であることから、多くの反響を得るに至った。その他にも論文や学会発表等を通して研究成果の普及に努めた。国内では異文化間教育学会、国際教育夏季研究大会、留学生教育学会、JAFSA、海外では NAFSA、AIEA、ベトナム貿易大学主催高等教育フォーラム、その他各種シンポジウムなどで成果を精力的に発表した。その他にも、全国の教職員向けに年に4、5回、継続して研修会を開催し、他大学の依頼を受けて教員研修を開催した。国際共修初級者から実践経験のある教職員、また研究者や大学執行部など、幅広い層を対象に国際共修の意義、理論構築、ペダゴジーを伝授した。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、予定していた調査の実施やアジア諸国での物理的な国際共修モデルの普及や成果発表が困難となるなど、様々な課題に直面し、結果的に計画を一部変更し、研究期間を延期せざるを得なくなった。しかし、オンラインで展開する国際共修という新たな課題への着手により、これまでの研究成果を基盤とした新規研究プロジェクトを立ち上げることが出来た。

2019年に研究成果を書籍『国際共修：文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』で発表した。ここでは、国内外で行った国際共修の事例研究、教育実践、国際共修の教授法、評価に関する学術的な検証結果が包含されており、国際共修に関心を持つ大学関係者のみならず、中等教育関係者や企業にも高い評価を得るに至っている。



2019年後半以降は、研究チームが蓄積した資源を基に、さらに研究の発展に臨んだ。しかし、2020年4月以降は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、世界規模で物理的な移動を基盤とした国際教育交流が中断したため、急遽、研究の方向性を変更せざるを得なくなった。従来に対面で行う教育に依拠していた国際共修に加え、オンライン化によるブレンデッド、ハイフレックス型国際共修の意義や手法の開発、また学習効果の検証を進め、これらを加味した教材を開発した。また、教育実践者や研究者のためにペダゴジーや教育資源を提供するホームページの整備も進めた。さらに、東北大学をモデルケースとし、オンライン国際共修の円滑な実施を支援する国際共修学生サポーター制度の設置および学生スタッフの育成に着手するなど、学生主体の国際共修のあり方を追求し教職員支援の強化に反映させる取り組みを行った。

パンデミックの発生による教育手法の変更とそれらを取り巻く研究、検証の方向性のシフトは想定外ではあったが、社会情勢の急激な変化に対応した新たなプロジェクトを推進したことで、国際共修のバーチャル展開のポテンシャルを認識する機会となった。これまで、対面で実施してきた教職員研修やシンポジウムなどの成果発信に新たな展開もあった。本研究プロジェクトの遂行により、ニューノーマルでさらなる発展が期待されるオンラインによる国際共修の意義やペダゴジーに関心を持つ教育実践者・研究者が多数、存在することが分かった。研修に参加する時間が取れない、また研修費が捻出できない、などの課題を抱える国際教育関係者への支援やネットワークも拡充できた。オンライン、ハイブリッド型の国際共修は、コロナ収束後も引き続き移動を伴わない国際教育手法の一つとして存在し続ける可能性が大いにあることが国内外の研究者に指摘されている。共通の課題を明らかにし解決にあたるという新たな目標を得ることが出来たため、総合的な評価として本研究プロジェクトは一定の成果をもって我が国およびアジア諸国の国際教育の発展に寄与したといえる。

国際教育後進国の日本では、内なる国際化の一環として行う国際共修のペダゴジー開発、効果検証に関する組織的な研究は未だ少ない。そのような背景の中、本研究では書籍、論文、国内外の学会、シンポジウム等を通して国際共修の効能や教育的価値を積極的に発信することができた。これにより国際共修を中核とした教育の国際化の発展に大きく寄与することができた。また、本研究プロジェクトに関わった研究者、また、プロジェクトの一環として実施した、国際共修をテーマとしたシンポジウムの基調講演や教職員研修等で構築したネットワークを基盤として、2021年には、文部科学省の世界展開力強化事業「大学の国際化促進プラットフォーム事業」のプロジェクト(プロジェクト名:国際共修ネットワークによる大学教育の内なる国際化の加速と世界展開)に採択されるに至った。本研究プロジェクトで蓄積した教育・研究知見を

他大学にも共有し、大学を越えた豊富な教育資源および学術交流網を相互活用する基盤の形成を目的としたものである。パンデミック発生後に集中重点化した教育国際交流のバーチャル展開を新常态に応じた形で定着させるための施策につなげることができたことは、大きな成果といえる。

欧米豪などの移民の受入を原資として発展した多民族国家とは事情の異なるアジア特化型「内なる国際化モデル」を構築しそれを世界に発信できたことは大きな成果と言える。近年では、日本の高等教育の国際化施策にも、多様な言語・文化背景の学習者が切磋琢磨する環境の担保とカリキュラムの国際化に関する言及が散見されるようになった。このように、「国際共修」が国内の大学を中心に広く知られるようになり、教育実践も拡充しつつある。今後は、本プロジェクトをさらに発展させ、教育実践の拡大に加えて、国際共修を手法とした教育実践の学習者の学びの成果、つまり、国際共修の質保証をキーワードとした研究を推進したい。学修成果に着目した研究はいまだ少ないため、国際共修ルーブリックの開発や、学修効果検証を含む新たな研究プロジェクトを立ち上げる準備を進め、国際共修のさらなる発展に寄与したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 13件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 末松和子	4. 巻 25
2. 論文標題 正課外国際交流活動における国際共修 - 正課に比した活動の特徴と学生の学びに着目して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 留学生教育	6. 最初と最後の頁 9-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 渡部 留美, 新見有紀子, 末松 和子, 渡邊 由美子	4. 巻 第7号
2. 論文標題 ピアサポートによる留学生支援 東北大学留学生ヘルプデスクの試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要	6. 最初と最後の頁 345-356
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 渡部由紀・末松和子	4. 巻 第7号
2. 論文標題 新型コロナウイルスの留学への影響と留学支援の課題 東北大学の事例	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要	6. 最初と最後の頁 91-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 尾中夏美、高橋美能、黒田千晴	4. 巻 4月号
2. 論文標題 国際共修の効能と課題ーコミュニケーション能力の向上を図る3大学実践事例ー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 留学交流	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋美能	4. 巻 20
2. 論文標題 日本の大学における人権教育の実践と課題 - 全国の人権教育実施調査を基に -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人権教育研究	6. 最初と最後の頁 33-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋美能	4. 巻 第7号
2. 論文標題 多様なバックグラウンドを活かす国際共修授業の実践 - オンラインで実践する授業のメリットとデメリット -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要	6. 最初と最後の頁 79-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋美能	4. 巻 第7号
2. 論文標題 対面による国際共修授業の意義と効果 - 新型コロナウイルス流行前の実践から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要	6. 最初と最後の頁 331-343
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋美能	4. 巻 第23号
2. 論文標題 多様なバックグラウンドを持つ学生が共に学ぶ人権教育 - 国際共修授業の効果と課題 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 留学生交流・指導研究	6. 最初と最後の頁 93 - 106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 黒田千晴・リチャード・ハリソン	4. 巻 第5号
2. 論文標題 プロジェクト学習型国際共修授業における教育実践 学習者間の学びを促す仕組みについて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸大学留学生教育研究	6. 最初と最後の頁 43-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 北出慶子	4. 巻 31巻3号
2. 論文標題 外国人・留学生支援ボランティア活動を通じた学びと課題 日本語教育人材育成のための多文化サービス・ラーニング開発に向けた系統的レビューの試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 19-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kazuko Suematsu, Hiroko Akiba, & Yukako Yonezawa	4. 巻 -
2. 論文標題 Bringing the world to the Japanese classroom	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 EAIE Spring Forum	6. 最初と最後の頁 16-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋美能	4. 巻 100号
2. 論文標題 国際共修授業の普及と多様なバックグラウンドの学生同士の多文化共生	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 留学交流	6. 最初と最後の頁 2020/1/13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 水松巳奈・山中葵	4. 巻 6号
2. 論文標題 個人の社会化が異文化理解を学ぶ学生に与える影響 - 日米の大学の授業におけるケーススタディ -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 紀要	6. 最初と最後の頁 9-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 末松和子	4. 巻 613号
2. 論文標題 東北大学の挑戦: サステイナブルな教育国際化の推進	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 IDE-現代の高等教育	6. 最初と最後の頁 21-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 末松和子	4. 巻 95
2. 論文標題 国際共修の検証 文献リサーチを通して見えてくるものー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 留学交流	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kazuko Suematsu	4. 巻 ACE
2. 論文標題 Internationalization at Home - Enhancing Students' Intercultural Competence in "Intercultural Co-Learning Class	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Conference Proceedings, Asian Conference on Education	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水松巳奈	4. 巻 5
2. 論文標題 入学前教育としての海外研修における学習成果の検証 - 参加者の体験レポートと追跡アンケート調査の比較から -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要	6. 最初と最後の頁 213-223
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋美能	4. 巻 18
2. 論文標題 グローバル化する社会における日本の「夫婦同姓」の問題 - 大学生の当事者意識を高める方策 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人権教育研究	6. 最初と最後の頁 55-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋美能	4. 巻 4
2. 論文標題 日本人学生の海外留学を促進する方策 - 東北大学の留学相談者と留学未経験者を対象とする調査結果を基に -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東北大学高度教養教育・学生支援機構 紀要	6. 最初と最後の頁 373-381
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 末松和子	4. 巻 68
2. 論文標題 留学生と国内学生が学び合う国際共修	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第68回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会研究収録	6. 最初と最後の頁 86-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計47件（うち招待講演 12件 / うち国際学会 18件）

1. 発表者名 末松和子・川平絵里
2. 発表標題 正課外における国際交流活動の教育的意義と課題 パイロット調査の分析と大規模調査に向けた展望
3. 学会等名 異文化間教育学会第41回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡部 由紀・末松 和子・新見 有紀子
2. 発表標題 技能実習生の定着要因と課題に迫る 多文化共修社会の構築に向けた事例研究
3. 学会等名 異文化間教育学会第41回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 末松和子・平井達也・米澤由香子・秋庭裕子
2. 発表標題 国際共修を实践から学ぶ：オンライン授業の導入で変わる学び・変わらない学び
3. 学会等名 JAFSA国際共修研修
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 末松和子・米澤由香子・黒田千春・尾中夏美・水松巳奈
2. 発表標題 オンラインでもできる！「国際共修」ワークショップ
3. 学会等名 国際教育夏季研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋美能
2. 発表標題 多様なバックグラウンドを生かす国際共修授業の実践 - オンラインで実施する授業のメリットとデメリット
3. 学会等名 第25回留学生教育学会年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 北出慶子
2. 発表標題 TEA（複線径路等至性アプローチ）と言語教育
3. 学会等名 TEA国際学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kazuko Suematsu
2. 発表標題 Be Global Project at Tohoku University
3. 学会等名 FORUM ON INTERNATIONALIZATION IN HIGHER EDUCATION（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 水松巳奈
2. 発表標題 大学のステークホルダーは国際化推進をどう捉えているのか？ - A大学を事例として -
3. 学会等名 多文化関係学会 第19回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 北出慶子
2. 発表標題 グローバル化時代における言語教育と言語教師の成長-「ポスト教授法」時代の言語教師とその支援方法を考える-
3. 学会等名 大阪大学マルチリンガルセンター講演（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Mina Mizumatsu
2. 発表標題 Teaching Intercultural Understandings to Multicultural Class in Hybrid Learning Environment: Utilizing a Social Performance Optimization Tool to Maximize Students' Social Presence in Class
3. 学会等名 異文化コミュニケーション学会 第35回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kazuko Suematsu, Tatsuya Hirai, Yukako Yonezawa, Hiroko Akiba
2. 発表標題 We can still make our classes diverse and interactive: Development of online intercultural collaborative learning classes
3. 学会等名 AIEA Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 北出慶子
2. 発表標題 言語文化的マイノリティの支援を通じたE-サービス・ラーニングモデルの開発
3. 学会等名 国際ボランティア学会 第22回 年次大会 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋美能
2. 発表標題 イギリスの学生と東北大生のオンライン交流の意義と効果 - 双方の学生が共に取り組むプロジェクトを事例に挙げて -
3. 学会等名 第9回留学生交流・研究指導研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kazuko Suematsu
2. 発表標題 Intercultural Collaborative Learning at Universities in Japan under/post Pandemic
3. 学会等名 RIHE Open Seminar (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 北出慶子・遠山千佳・村山かなえ、安田裕子・山口洋典
2. 発表標題 多文化コミュニティでの越境的な 対話を通じた発達の径路
3. 学会等名 日本発達心理学会 第32回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kazuko Suematsu
2. 発表標題 Diversifying Students' Innovative Cross-Border Education through Developing and Implementing International Strategy
3. 学会等名 Forum on Internationalization of Higher Education (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mina Mizumatsu
2. 発表標題 Enhancing On-Campus Global Learning: The Case of a Japanese University
3. 学会等名 NAFSA Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Keiko Kitade
2. 発表標題 Reconceptualizing language education from the perspective of learners' life transitions through the study of transnational students
3. 学会等名 International Society for Language Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀江未来・秋庭裕子・高木ひとみ・筆内美砂・平井達也
2. 発表標題 『異文化体験から学ぶ』教育実践の質向上を目指して 国際教育ファシリテーター育成の現状と展望
3. 学会等名 異文化間教育学会第40回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mino Takahashi
2. 発表標題 Practices and Challenges of Human Rights Education in Japanese Universities
3. 学会等名 International Conference on Education for Human Rights and Democratic Citizenship: the challenges of intergenerational justice (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡田昭人・末松和子・中矢礼美・宮崎幸江
2. 発表標題 グローバル時代における言語 & middot; 文化教育 - 留学生教育 & middot; 外国にルーツを持つ学生に対するプログラムの多様な評価方法をめぐって -
3. 学会等名 日本比較教育学会研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 末松和子
2. 発表標題 異文化理解セミナー
3. 学会等名 公設試職員研修講義（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北出慶子
2. 発表標題 日本教師教育のためのサービス・ラーニング科目開発-言語教師教育と市民性教育-
3. 学会等名 第4回日本サービス・ラーニング・ネットワーク全国フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋美能
2. 発表標題 多文化共生社会の実現に向けて
3. 学会等名 総務省主催宮城県共催多文化共生地域会議
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 末松和子・尾中夏美・黒田千晴・高橋美能
2. 発表標題 国際共修授業の効能と課題：コミュニケーション能力の向上を図る3大学の事例
3. 学会等名 第24回留学生教育学会年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 末松和子・北出慶子・米澤由香子・水松巳奈
2. 発表標題 カリキュラムの国際化と国際共修 について実践しながら学ぶ
3. 学会等名 国際教育夏季研究大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Coelen, R., Tran, L., & Akiba, H.
2. 発表標題 Encompassing multiple voices: a comparison of study abroad trends and practices across Australia, Europe and Japan
3. 学会等名 EAIE Annual Conference（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山口洋典・北出慶子・遠山千佳・村山かなえ
2. 発表標題 多文化理解を促すための中道的言語文化と表現の可能性 Story Circlesを通じた対話的理解の省察的实践
3. 学会等名 国際ボランティア学会学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kazuko Suematsu, Hiroko Akiba, Yukako Yonezawa, & Tatsuya Hirai
2. 発表標題 Going beyond campus: Comprehensive internationalization with local and business communities
3. 学会等名 AIEA Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋美能
2. 発表標題 留学生と日本人学生が共に学ぶ人権学習 - 多文化共生の実現を目標に据えて -
3. 学会等名 第8回留学生交流・指導研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 末松和子
2. 発表標題 「国際共修」によるグローバル人材育成:国内学生と留学生を分断しない意味ある実践の構築
3. 学会等名 千葉大学アカデミックリンク/ALPS セミナー (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中井好男・北出慶子・大河内瞳・平野莉江子
2. 発表標題 成長し続ける教師のための省察的实践と未来展望の創造 持続可能性のある教師コミュニティへ
3. 学会等名 言語文化教育研究学会 第6回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 北出慶子・香川秀太・山口洋典・義永美央子
2. 発表標題 越境による「第三の知」創造を目指した実践 交差と衝突による変容から言語文化教育の展望を考える
3. 学会等名 言語文化教育研究学会 第6回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 北出慶子
2. 発表標題 多言語・多文化越境経験とライフキャリア 海外留学・就職活動経験についての語りとその意味付け
3. 学会等名 TEAと日本語教育研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kazuko Suematsu
2. 発表標題 Strategies for Promoting Student Mobility through Development of Permeable System
3. 学会等名 Forum on Internationalization in Higher Education（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 末松和子・尾中夏美・黒田千晴・米澤由香子・北出慶子
2. 発表標題 留学生とともに学ぶ国際共修：効果的な授業実践へのアプローチ
3. 学会等名 異文化間教育学会第39回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 末松和子
2. 発表標題 留学生と国内学生が学び合う国際共修
3. 学会等名 第68階東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 末松和子・高橋美能
2. 発表標題 留学と国内学生が共に学ぶ国際共修ファシリテーター・ワークショップ
3. 学会等名 留学生教育学会第23回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazuko Suematsu
2. 発表標題 Comprehensive Internationalization at National Research University: Strategies, Accomplishments, and Challenges
3. 学会等名 JAISE-KAIE Joint Seminar “Developing Future International Student Exchange” (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazuko Suematsu
2. 発表標題 Present to Future: Research Collaborations on Intercultural Co-learning
3. 学会等名 Research Workshop in Higher Education, the University of Melbourne (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋美能
2. 発表標題 グローバル化する社会における日本の「夫婦同姓」の問題 - 大学生の当事者意識を高める方策
3. 学会等名 異文化間教育学会第39回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 島崎薫
2. 発表標題 留学生と国内学生がともに学ぶ国際共修の実践：東北大学の事例 をもとに
3. 学会等名 2018年度山梨学院大学FD・SD研修会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 プレフューメ裕子・島崎薫
2. 発表標題 日米間学生協働プロジェクトの成果と課題：「Humans of Minamisanriku」実践報告
3. 学会等名 アメリカ日本語教師会2019年春季大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北出慶子
2. 発表標題 国際共修授業のアセスメントー担当教員のピリーフと授業設計ー
3. 学会等名 カナダ日本語教育振興会年次大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hiroko Akiba, Kazuko Suematsu and Yukako Yonezawa
2. 発表標題 Bringing out the best in faculty: Enhancing intercultural interaction and learning in the classroom
3. 学会等名 Association for International Education Administrators (AIEA) Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yukako Yonezawa
2. 発表標題 Intercultural co-learning in Japanese universities: Research and practice
3. 学会等名 Research Workshop in Higher Education, the University of Melbourne (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮崎悦子・渡部留美・末松和子
2. 発表標題 留学生アドバイジングにおける専門性を考えるワークショップ
3. 学会等名 留学生教育学会第23回研究大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 末松和子・秋庭裕子・米澤由香子(編著)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 328
3. 書名 国際共修：文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ	

1. 著者名 Keiko Kitade (Ed. Carol Chapelle)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Oxford, UK: Wiley-Blackwell	5. 総ページ数 1288
3. 書名 The Concise Encyclopedia of Applied Linguistics	

1. 著者名 佐藤智子・高橋美能 共著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 216
3. 書名 多様性が拓く学びのデザイン - 主体的・対話的に他者と学ぶ教養教育の理論と実践	

1. 著者名 渡部由紀・末松和子・高橋美能	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東北大学 高度教養教育 &middledot; 学生支援機構	5. 総ページ数 106
3. 書名 PDブックレットVol.12 海外留学プログラム開発のためのハンドブック	

1. 著者名 高橋美能	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東北大学出版会	5. 総ページ数 256
3. 書名 多文化共生社会の構築と大学教育	

1. 著者名 富田真紀・水松巳奈（編 グローバル人材育成教育学会）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 グローバル人材育成教育学会	5. 総ページ数 438
3. 書名 学内と海外で育成するグローバルリーダー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

国際共修 http://intercul.ihe.tohoku.ac.jp/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	秋庭 裕子 (Akiba Hiroko) (10313826)	一橋大学・大学院経営管理研究科・講師 (12613)	
研究分担者	黒田 千晴 (Kuroda Chiharu) (30432511)	神戸大学・国際教育総合センター・准教授 (14501)	
研究分担者	水松 巳奈 (Mizumatsu Mina) (30726211)	東洋大学・国際教育センター・講師 (32663)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	尾中 夏美 (Onaka Natsumi) (50344627)	岩手大学・国際教育センター・教授 (11201)	
研究分担者	北出 慶子 (Kitade Keiko) (60368008)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	
研究分担者	高橋 美能 (Takahashi Mino) (60574168)	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・准教授 (11301)	
研究分担者	米澤 由香子 (Yonezawa Yukako) (60597764)	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・准教授 (11301)	
研究分担者	村田 晶子 (Murata Akiko) (60520905)	法政大学・グローバル教育センター・教授 (32675)	
研究分担者	平井 達也 (Hirai Tatsuya) (80389238)	立命館アジア太平洋大学・教育開発・学修支援センター・教授 (37503)	
研究分担者	島崎 薫 (Shimasaki Kaori) (70746966)	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・講師 (11301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 夏季国際教育研究大会	開催年 2020年～2020年
----------------------	--------------------

国際研究集会 国際共修：新たな学びの環境を創り 教育国際化を捉え直す	開催年 2021年～2021年
---------------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------